

一八八三年十月十日(水)

アダル氏の宅にてドウルガー・プー ज्याの大祭に出席された聖ラーマクリシユナ

アダル氏邸におけるナヴァミー・プー ज्या(訳註)の日(ドウルガー拝礼祭第三日目)、邸内の礼拝室の前に聖ラーマクリシユナは立つていらつしやる。日が暮れてから大聖ドウルガーへの献灯アーラテをご覧になった。アダルの家では、この祭りにタクールを招待して、お越しを願ったのであった。

今日は水曜日、キリスト暦一八八三年十月十日、アッシン二十四日。聖ラーマクリシユナは信者たちを連れていらつしやったが、そのあいだに、バララムの父親とアダルの友人である退職視学官サーラダさんが来ていた。アダルは近隣の人々や親類の人々を招待していたので、その人たちも大勢来ていた。

聖ラーマクリシユナは晩の献灯アーラテをご覧になつてから、前三昧状態になられて礼拝室の前に立つたまままでいらつしやる。そして、大実母に歌を聞かせていらつしやる。

アダルは在家の信者であり、ほかにも大勢の在家信者が出席していて、彼等はみな一緒に、三つの苦惱(物質的、精神的、靈的)を持つている。それをよく知つておられる聖ラーマクリシユナは、皆の抜苦与楽のため、宇宙の大実母マの讃歌を唱えていらつしやるところである。

救いの女神よ！ いざ速かに救いたまえ

死神(ヤマ)におびえて わたしは死にそうです

世界の親として、人々を護り

皆を引きつけ魅了する生みの母

ヤシヨーダーの胎はちより産まれ

ハリ(クリシュナ)の遊戯リイラよりなるお方

プリンダーヴァンではラーダーとなつて

ブラジャの野を恋人と遊び歩き

(訳註1) ナヴァミー・ブージャ——ナヴァミーは九日目の意味で、ナヴァミー・ブージャは、九日目の礼拝プイビヤという意味。ドゥルガー女神が牛の悪魔マヒシャースラを退治した神話に由来するナヴァ・ラートリーの祭典の九日目の礼拝のことである。ベンガル暦アッシン月白分一日から九日間続くナヴァ・ラートリーの初日はマハーラーヤと言い、この日ドゥルガー女神が地上に降りて来て、六日目の夕方には女神の魂はベルの木(ルヴァ)を伝つて信者たちの作った神像の中に入られる。七日目からの三日間、信者たちは神像を生きた女神として、果実、食事、花などを供えて礼拝する。ベンガル地方では七日目から九日目の礼拝を特に、ドゥルガー・ブージャと呼んでいる。十日目の朝、悪魔マヒシャースラに勝利したドゥルガー女神は、神像を離れて帰っていかれる。十日目をヴィジャヤ・ダシャミーといひ、ヴィジャヤは勝利、ダシャミーは十日目を意味する。抜け殻となった神像は川や池に運んで水に浸して、信者たちはその時の水を持ち帰り、皆に振りかけて祝福する。

甘く楽しい輪踊りに夢中になって

どっぷり愛に浸っていた

山の娘ギ(バルヴァテイ)、牛飼いの娘、ゴウヴィンダ(クリシユナ)の心を魅了するお方

あなたはガンガー、解脱を与えしお方

楽士ガンダルヴァの住む天界から来た光り輝くお方

シヴァの永遠の妻 全きイーシャーナの妻

至福の女神、あらゆる姿を具えたお方

一切性にして無性、シヴァの恩寵を受けられたお方

あなたの栄光を理解できるのは誰か

イーシャーナ——シヴァの別名。「支配者」
の意

〔タクール、霊的恍惚境にて——宇宙の大実母と対話〕

聖ラーマクリシユナは、アダルの家の二階のホールに上がってお坐りになった。その部屋には大勢の招待客がすでに入っていた。

バララームの父親とサーラダさんがタクルの傍に坐った。タクールはまだ半三昧状態である。招待客たちに向かってこんなことをおっしゃる——「おお、旦那さん方、わたしはもう食べました。さあ、お前さんたちも上がって下さい」

アダルの供え物を大実母がよるこんでお受け下さったので、聖ラーマクリシユナに宇宙の大実母が

乗り移ってこんなふうに言われるのだろうか？「わたしは食べたよ。さあ、お前たちもお下がりをお上がり」などと。

タクールは相変らず半三昧状態で宇宙の大実母に話しかけておられる。「マー、わたしが食べようか？ それともあんたが食べる？ マー、歡喜よろこびの源の美しい方」

聖ラーマクリシュナは、大実母と自分を同一視していらっしやるのだろうか？ 宇宙の大実母——そのかたが子供のような人物となつて（息子として）、人々を導くために化身なされたのだろうか？ それでタクールは、「わたしは食べた」とおっしゃったのか？

こんどはその霊的恍惚のなかで、肉体内の六つのチャクラの間に大実母の姿をご覧になつたらしい！ 恍惚状態で歌をおうたいになる——

おお 世界を魅了し

シヴァさえ魅了する大実母よ

ムーラダーラの蓮の座に住みて

ヴァーナヴァーナを奏でる大実母よ

大いなる真言マハーマン트라に属性をくくりつけ

スシユムナー、イダー、ピンガラを震わせて

赤い六弁の蓮の花咲く恐るべき根(スワディスターナ)では 朝の調べを奏でかな

へそ(マニプーラ)では雨期の調べを

心臓(アナハタ)では夕べの調べを

喉(ヴァイシユッタ)では美しい調べを

眉間(アジナー)では心地よい調べを奏で

妙なるリズム、テンポ、メロディーで

三つの弦を震わせながら七番目の座に達し

七番目の座から飛び出していく

三つの弦——体内で氣フレイの流れる三つの主要な
経路ナディ——シユムナー、イダー、ピンガラ—
七番目の座——サハスラーラ・チャクラ

マハイマヤー
大幻力よ 汝は幻の網で全ての存在を縛り

至高意識に溶け込んで

光を放って安座する

聖ナンダ・クマールは言う

その原理を はっきりと知っている人などいるのだろうか？
タットワ

三つの属性で その黒い顔を隠しているのだから——
グナ

続けて歌われる

第6章 アダル邸でのドゥルガー大祭

思うだけでも魂がふるえる――

あの方の名にカーラ（時・死）も無く

大カーラ（シヴァ神）さえも足の下

どうしてあの方　カーラ（黒）なのか

黒いものなら数ある中に

とびきり玄くろいあの方を

胸内深く念じていれば

胸の蓮座に光差す

その名も黒女カールー　相すがたも玄黒カールー

黒い色よりなお玄くろく

あの色をみた人　とりこになって

ほかの色には目もくれぬ

ブラサードいぶかり問いがたり

そんな女はどこに住む

見もせて名前をきくだけで

心はそちらに行きつきり

マー(恐れのない御方)に全てを委ねさえすれば、すべての恐怖は去るのである。それで、信者たちに
無畏(恐れが無いこと)を与えようとお気持ちで、次の歌をおうたいになるのか――

無畏の足元に命を託し

われすでに死王も恐れず

大なる真言カーリーの名を

わが髪束の頂きに結び

この世の市場に肉体を売りて

聖きドウルガーの名をば買い来ぬ

カーリーの名の万願結実の木を

私は胸の野原に植えたよ

死王が来たら胸をひらいて

この木が育っているのを見せよう

体のなかの六つの敵は

はるか彼方に追い散らして

ドゥルガーの名を讃えながら

安らかに旅立とうとブラサードは言う

六つの敵——色欲、怒り、貪欲、高慢、嫉妬、
愛着

サーラダさんは息子を亡くした悲しみに打ちひしがれていた。それで友人のアダルが、彼をタクルの許に連れてきたのである。彼はガウランガ(チャイタニヤ)の信者であった。すると、彼を眺めて聖ラーマクリシュナは、聖ガウランガからの靈感を受けられてお歌いになる——

「わたしの体はなぜ黄金色」

(一八八四年九月十四日に全訳あり)

こんどは、聖ガウランガの気持ちになりきって、次の歌をおうたいになる。サーラダさんはこの歌が大好きだろうとおっしゃって——

聖ガウランガはまさに恍惚として

笑い 泣き 踊り 歌う

森を見ればプリンダーヴァンと思い
ガンガーを見てはヤムナー河を思い
大声をあげて泣きさけぶ！

ガウルの体の外は黄金色^{こがね}
胸はクリシュナのごと 玄く深し^{くろ}
ガウルは自分の足に額をつけ
うやうやしく祈りを捧げている

次の歌――

町の人たちワイワイやじる
ガウルに夢中の私の想い
わかる筈とてないものを
おお 恥ずかしや 彼のひとに
命ゆだねたこのわたし

ガウル(チャイタニヤのこと、聖ガウランガとも言う)
を夢中で信仰している女信者のうた

ある日 シュリーヴァアースさんのお屋敷で

狂ったようにキールタンをうたい

ガウルは中庭にまろび伏し

ごろごろおいておいでたを

片隅^{すみ}で見っていた私まで 気が遠くなり

シュリーヴァアースの奥様

必死の介抱で

やっと気がつくほどでした

ある日 乱暴者に蹴飛ばされながら

ガウルは町でキールタン

賤民 よそのもの 一切かまわず

ガウルはやさしく抱きしめて

ハリ ハリ ハリ と叫びつつ

ナディアアの市場を通つた

そのとき私もいっしょに従いて

かがやくようなガウルの

ナディアア(ナバドウィーフ)——チャイタニヤの
生誕地

二つのお御足みあしを 拜まじんできましたよ

ある日 ガンガアの川岸で

ガウルは石段ガイトに立っていた

月とお日さまいっしょにしたように

ガウルの体は光ってた

ガウルの美しい姿を見ては

シャクテイ派も シヴァ派も 宗派を忘れ

わたしも水がめ 手から落として

おしゃべり義妹いもとがそれを見て――

バララームの父親はヴィシユヌ派である。それで、こんどは聖ラーマクリシユナは、クリシユナに
対するゴーピーたちの狂ったような熱愛ブレイマの歌をおうたいになる――

恋しいクリシユナ 来ないので

独り部屋居の切なさよ

恋しいクリシユナ わたしの髪なら

きれいに見事に編み上げて

バクルの花をかざるのに

バクル——金きん香こう木ぼく、サンスクリット語でヴァ
クラ

恋しいクリシユナ 腕輪になつて

わたしの腕についてたら

いつもジャラジャラ見せびらかして

都大路を歩くのに

恋しいクリシユナ 竹笛ふけば

ヤムナーに水汲みに行ったわたしは

山火事で火に囲まれた牝鹿のように

きよろきよろと辺りを見廻す

聖ラーマクリシユナ、全宗教の調和をバララームの父と話す

バララームの父親は、バッドラック、その他オリッサ州の各地に土地を持っている財産家で、プリ

ンダーヴァン、プリー、バッドラックなど方々に、巡礼修行者のための無料宿泊所を建てて奉仕している。彼自身も晩年は、プリンダーヴァンのシャーマ・スンドルの住居で神に仕える生活を送っていた。バララームのお父さんは、伝統的なヴィシユヌ派信徒である。大抵のヴィシユヌ信者たちは、シャクテイ派やシヴァ派、ヴェーダーンタ派の人たちと打ち解けない。それどころか、あからさまに敵意を抱いている人もある程だ。だが聖ラーマクリシュナは、このような偏狭な考え方が大嫌いでいらつしやる。タクールは、熱心になりさえすれば、どの道を通つても、どの宗派に属していても、きつと神を覚ることができるといつも言つておられた。見たところ、多くのヴィシユヌ信徒は花をきれいにかざつたり、経典を読んだりすることには熱心だが、肝心の至聖さまをつかもうとする熱意に欠けている。それでタクールは、バララームのお父さんに教訓を与えるおつもりらしい。

〔以前の話——聖ラーマクリシュナ、ヴィシユヌ派僧侶の衣を着けラーマ真言を受けたこと〕
校長に向かつておつしやる——。

聖ラーマクリシュナ「偏つてはいけないと思つてね。プリンダーヴァンでヴィシユヌ派僧侶の衣を受けたんだ。三日間、同派の修行もした。それから南神村ドッキネーシヨルに帰つてラーマの真言マトウを授けてもらった——それで、(ヴィシユヌ派の)長い印を額につけて、ダイヤのついた数珠マイトライを首にかけて……。でも何日かしたら、全て外してしまつたよ」

「バララムの父への教え——神は無性にして一切性——有形にして無形」

「染物桶を持っている人がいた。人びとは彼のところへ布を染めに来た。桶のなかには染料を溶かした液が入っている。ところが、どの色を注文しても、その桶のなかに布を放りこみさえすれば注文の色に染まる。ある人がそれを見てびっくり仰天して、染めている人に言った。——『お前さんの使ってる、その染粉を私に分けておくれ』と」

タクールは、^ゞどんな宗教に属している人でも、自分のところへ来て靈性を獲ることができるといふことをおっしゃったのだろうか？

聖ラーマクリシュナは又、続けてお話しになった。

「樹の上にカメレオンが一匹いた。一人の男が緑色だと見た。二番目の人は黒色と見た。三番目の人は黄色と見た。こんなふうによくの人がそれぞれ違った色で見ていた。そして皆は互いに、あの動物は緑だ、いや赤だ、いや黄色だと口げんかを始めた。そのとき、樹の下に一人の人間が坐っているの、皆、そこへ行つて自分が正しいことを証明してもらおうとした。すると、その人はこう答えた。『わたしは一日中この樹の下にいるが、カメレオンのことはよく知っている。始終色が変わるのです。かと思うと、時々まったく色がなくなってしまうのです』」

聖ラーマクリシュナは、^ゞ神はあらゆる性質をそなえて様々な色形をおとりになる^ゞということをおっしゃったのか？ また、^ゞ本来無性であつてどんな色でもない。言葉と思想を超えている^ゞといふことを？ そして、^ゞ信仰のヨーガでも智慧のヨーガでも、どんな道を通つても神の不滅の甘露を

飲むことができる」ということをおっしゃったのではないだろうか？

聖ラーマクリシュナはバララムの父親におっしゃる——

「本はもうあんまり読まんことだ。だが、信仰の本はいいよ。たとえば、『聖チャイタニヤ・不滅の行伝(チャイタニヤ・チャリタームリク)』のような——」

(ラーダーとクリシュナの愛の遊戯の目的——甘露とそれを飲む人——必要な一つのもの)

「つまり、こういうことだよ——あの御方を愛し、あの御方の甘くやさしいお情けを味う」ということ。あの御方は甘露、信者はそれを飲む人。あの御方は蓮華、信者は蜂、信者は蓮華の蜜を吸う。

信者が神なしにはいられないように、神も信者なしにはいられない。そこで、こんどは信者が甘露となり、神がそれを楽しむ。信者が蓮華となって、神が蜂となる。あの御方は、自分の甘さを味わうために、二つになっていらつしやるんだよ。それがラーダーとクリシュナの遊戯だ^{リーラ}」

(バララムの父の教訓——巡礼、数珠、服装などの外形的な規則はいつまで守るべきか?)

「聖地巡礼をしたり、首に数珠をかけたたりする儀式的なことは、初めの間は守らなくてはいけないよ。^{ヴエスト}本質をつかみ神を覚つたら、外の行事はだんだん脱^{おち}落^ちていく。そうなれば、あの御方の名をいつも念じて御名を練り返し黙想すること、ただそれだけになる」^(原典註)

「十六ルピー分のパイサ銅貨は山ほどあるが、十六ルピー分の銀貨なら大したカサにはならない。そ

それを金貨一枚に換えたらほんのわずかのカサだ。それをダイヤ一個に換えたら目にもつかないようなごく小さいものになるだろ^(原典註2)。」

ヴィシユヌ派の人たちは、首に数珠をかけるとか、その他規則通りのことを守っていないときびしく批難する。それでタクルルは、神を覚った後は、数珠、服装といったものにあまりこだわる必要はない、ということをおっしゃったのだろうか？ 本質をつかんだなら、外面的な行事は次第に減少していくのである。

聖ラーマクリシユナはバララームの父親に向かっておっしゃる――

「カルタバジャ派の人たちは、信者をプラヴァルタカ（初心者）、サーダカ（かなり信仰が深く進んだ人、修行中の信者）、シッタ（成就者、完成者）、シッタのシッタの四つに分けている。プラヴァルタカは額にちゃんと宗派の印をつけて、首に数珠をかけて、何でも規則通りにする。サーダカ――これは、それほど目立ったふうをしない――ちようど吟遊僧^{バツル}のように。シッタ――これは神の実在について真正の信念を持っている人。シッタのシッタというのはチャイタニヤ^{デルヴァ}様のような方のこと――神様に会って、そ

（原典註1）だが、自己^{アイトマン}の本性を知って、それに満足し、歎喜し

それに安んじ、楽しむ者には、もはや為すべき義務^{シゴト}はない――ギター3・17――
（原典註2）高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。

――マタイによる福音書 13章46節――

して、いつも神と話をしている人。シツダのシツダこそ最高の境地だ」

〔バララームの父への教訓——サットヴァ性の人の修行——万教調和、頑迷盲従を捨てよ〕

「サーダカにもいろいろ種類がある。サットヴァ性のサーダカは修行礼拝は人目につかずする。礼拝誦経は、むしろかくれてする位で、外見では普通の人とかわらないような感じだが、蚊帳カマヤの中で瞑想しているのだ。

ラジャス性のサーダカは人目を引く派手な様子だ。首には称名用の数珠ヒモをかけ、赤土色の衣を着て、絹織物の腰衣カポルをつけて、数珠のところどころに金の粒をはめ込んでいる。看板で商品の広告をする小売屋の主人のようだ」

ヴェישヌ派の信者たちは、ヴェーダーンタ派の考え方やシャクティ派の考え方をあまり評価しない。バララームのお父さんにこうした狭い見を捨てさせようとして、タクールはいろいろお教えになる。

聖ラーマクリシュナ〔バララームの父たちに向かって〕どんな宗教でも、どんな考え方でもみんな、あの一なる神を呼んでいるんだよ。だから、ほかの宗教や考え方を軽蔑したり憎んだりしてはいけない。ヴェーダではあの御方をサッチダーナンダ・ブラフマンと言っているし、パーガヴァタなどのブラーナではあの御方をサッチダーナンダ・クリシュナと言っているし、タントラではサッチダーナンダ・シヴァと言っている。みんな、あの全一のサッチダーナンダのことだ。

ヴェイシユヌ派にはいろいろな分派があつてね、ヴェエーダでブラフマンと言っている御方のことを、あ
る一派ではアレク・ニランジャンと言う。アレクとは、つまり、コレと云つて指すことの出来ぬもの、
感覚器官を通じてはわからないものことだ。その一派は、ラーダーもクリシユナもアレクの二つの
泡だと言う。(訳註——ニランジャンは、純粹^レの意味)

ヴェエーダーンタの考え方では、神の化身などというものは無いのだ。ヴェエーダーンタ派の人たちは、
ラーマもクリシユナもサッチダーナンダの大海の二つの波にすぎないという。

一つだけで二つはないのだ。どんな名で呼んでも、ほんとに心の底から神様を呼ばばきつとあの御
方のところへ行き着く。一生懸命になりさえすればいいんだよ」

聖ラーマクリシユナは以上のような教えを信者たちに話されながら、神聖な興奮状態に浸りきつて
おられた。やや感情が落ち着かれると、今度はこんなことをおっしゃる。

「あんたはバララームの父さんだったかい？」

〔バララームの父への教訓——熱心になれ〕

一同、しばし沈黙。バララームの老いた父親は、無言で数珠をつまぐっている。

聖ラーマクリシユナ、校長たちに向かつて——

「なあ、この連中はこんなに称名したり聖地巡礼したりするのに、どうしてこんなふうなんだろうな？

一年が十八ヶ月みたいにさ！

ハリシユに言ったものだよ。『神に対する情熱がなければ、カーシー（ベナレス）に行ってもムダなことだ』と。情熱があれば、ここだってカーシーと同じことだ。

さんざ巡礼したり、さんざ称名したりするのに悟れないのはなぜだい？ 情熱がないからだよ。胸を熱くして、焦がれる想いであの御方を呼ばってみろ。あの御方はちゃんと会って下さるんだ！

芝居の始まりは、舞台はえらくコチヨモチヨ、コチヨモチヨ騒がしい。まだクリシユナが登場しないからだ！ それからナーラタ賢人が熱愛の思いでプリンダーヴァンにやってきて、ヴィーナをかき鳴らしながら呼び且つ語る——『おお、ゴーヴィンダ（クリシユナ）よ、わが命よ、わが魂よ！』そうなる、クリシユナは出てこないわけにはいかなくなる。牛飼い少年たちを従えて、正面から登場なすつてこうおっしゃる。『白い牝牛よ、とまれ！ 白い牝牛よ、とまれ！』（訳註——牛の世話をしていたクリシユナが、ナーラタの訪問に気付いて牛の動きを止めようとして言った言葉）